

十九世紀ドイツ道徳統計学の自由意志論争

——統計知とリベラリズムの統治との複雑な関係——

生間元基

1 目的

この報告の目的は、十九世紀ドイツの道徳統計学における自由意志論争を読み解き、その歴史的意義を、フーコー派の統治性研究の観点から論定することである。

自由意志論争の概略は次の通りである。仏語圏ベルギーの統計学者ケトレは、犯罪や自殺といった道徳統計の経年的な「規則性」を発見し、こうした行為を生み出す社会的原因に政策的な介入をかけてその数を制御すべきだと主張した。ところで、犯罪を行わせる社会的原因の存在は、自由意志の不在を意味するのか？ もしそうなら、自由意志を根拠に刑事責任を問うことはできなくなる。ドイツの統計学者たちは、社会的原因の存在は自由意志の不在を意味しないという立場からケトレを批判した。

自由意志論争は、いわば科学による社会認識の更新と、刑事司法というハードな制度形象との接点として注目に値する。大局的に見れば、個々人を自由に振る舞わせながらマスとしての人口集団を制御する「リベラリズムの統治」の一時代を画するものとまでは言える。だが問題はその種差である。結婚数や出生数の「規則性」なら政治算術・国情論の時代にすでに発見されている。十九世紀後葉には数理の洗練によって「規則性」という認識そのものが崩れ始める。統計と統治の関係の長い歴史に、十九世紀中葉のこの論争は何を付け加えたと言えるだろうか。

2 方法

自由意志論争を再発見したのは、いわゆる「確率革命」の科学史の諸研究である。なかでもハッキングの研究は、フーコーの統治性論を引き継ぐものとして広く参照されている。この報告ではハッキングの所説を検証しつつ、ドイツ道徳統計学の一次文献群を解釈していく。

3 結果

ハッキングは、ケトレらによる「西側」の道徳統計学が「原子論的、個人主義的、リベラル」であったのに対し、「東側」のドイツ道徳統計学は「全体論的、集団主義的、保守的」であったために、西側の統計法則という考え方が馴染まなかったと整理している。道徳統計の規則性は法則ではない、だから自由意志への制限はない、というのが「東側」の主張のハッキングによる要約である。

一次文献と突き合せると、こうしたハッキングの整理には納得しがたい所がある。ドイツ道徳統計学においては、「文化状況」に埋め込まれた個人というハッキングに言わせれば「東側」的な認識が、環境への介入を通して人々の挙動を制御する「西側」的な統治技術と順接している。ドイツの議論の趨勢は、自由意志の積極的擁護というより、むしろ統計による原因究明は自由意志の有無とは無関係だという見解に収斂していく。その中で、社会的原因の強さが「自由」への制限の度合いとして名指し直されるのである。

4 結論

より踏み込んで言えば、統治の歴史における自由意志論争の意義は、理念としての自由ではなく、経験的に観測された振る舞いの自由度だけがリアルであるような言説空間を開いた点にあるのではないか。ライツ・トークがそれ自体として通用せず「エビデンス」の土俵に引きずり出されるような現代の言論状況を省みると、このことの意義は小さくない。

文献

Foucault, Michel, 2004, *S?curit?, territoire, population: cours au Coll?ge de France (1977?1978)*, Paris: Seuil/Gallimard.

Hacking, Ian, 1990, *The Taming of Chance*, Cambridge, England: Cambridge University Press.